

伝説

申京淑

(辻本武 訳)

社稷洞へ行く道で、ある一軒の家が偶然目に入った。それは敵産家屋（植民地時代の日本人家屋）で、狭い庭に一抱えほどの太さのリンゴの木が一本植えられていた。頭の髪を巻き上げ、金色のピンで首の後ろで固定した老婦人がその木の下でうとうとと居眠りしていた。五月だったか。婦人が読みかけていて落とした薄い本の上に、リンゴの花びらが散っていた。

幼かった頃。

若くして未を亡くした叔母は明るい月光の夜に幼い私を膝の上に座らせて、自分たちが暮らす藁葺の家の天井裏には家族を守ってくれる青大将が一匹住んでいるという話を聞かせてくれた。

——だから、怖がってはいけないよ。

その家を急いで通り過ぎるだけのつもりだったが、その家に出会ってから私はしばし言葉が出なくなつた。私はただ話を採し回る人。その狭い庭の一抱えあるリンゴの木が、潤っていた私の

人生に泉のように流れて来て、リンゴの花びらを落としていった。花がみんな散る前に、そのリンゴの木にまつわる次のような話を聞き出したのである。

1

倭政（日本の植民地時代）から軍政（米軍占領時代）を経て、李承晩政権が色んな不安を抱えたまま出発した。李政権はアメリカ軍政が維持し、親日勢力をそのまま受け入れたために植民地から解放された民族国家としての大義名分を立てることが出来ず、それに対抗する民衆運動は五・一〇総選挙（韓国建国のための選挙）を目前にした選挙反対闘争、二・七救国闘争（国連の介入に反対する運動）など熾烈になっていく。一九四八年一月二〇日には、全羅南道の麗水に駐屯していた国軍第十四旅団の反乱で、智異山一帯が反乱軍の勢力下に入る。経済的不安が激しく、政府歳出の六〇％が通貨膨張のために使われ、物価が二倍に跳ね上がった。李承晩政権は脆弱な支持基盤と深刻な経済危機を打開するためにアメリカの援助を導入する一方、「昼食は平壤で、夕食は新義州で」（北進統一すること―新義州は中朝国境の都市）を大言壮語する。朝鮮半島を太平洋地域の防衛線から除外するというアチソンラインが発表される。六・二五（朝鮮戦争）の勃発前から南北間の小規模武力衝突が相次いで発生する。そんな不安定な土地でも、リンゴの木には花が咲き、そして実る。ある者は愛し合い、ある者は田に肥料をやり、ある者は人を待ち、ある者は復讐をし、ある者は自殺をし、ある者は店を出し、ある者は本を読む。

四月の朝。

女は屋敷の裏庭にあった自転車を表門の外に引つ張り出して、屋敷から五〇〇m離れたリングゴの木に向かつて、ペダルを踏んだ。リングゴの木の向こう側に乳母が暮らしていて、彼は女と一緒にその乳母を訪ねるために、その木の下で待っているのだ。温かく明るく笑う表情が女の厚い唇の周りに広がる。もうすでに彼がそこに着いていることは、一台の自転車が横にあったことで分かった。女は額に白い鉢巻をし、女の柔らかい頬にはすべすべした産毛が光り、自転車のハンドルを握る腕はまるでワタリガニの身のように白く柔らかく、その腕に白色の手拭いをくくっている。女はその手拭いで時々額に噴き出る汗を拭う。自転車には昔から乗り慣れていたようで、女が左手で汗を拭う時には右手だけでハンドルを握って走る。女の豊かで黒い髪の毛が風になびく時、空気のなかに女の汗のにおいが混じる。それはスマイレの花の香りだったかも知れない。

あのリングゴの木が見える。

九歳の時、女はあのリングゴの木の下で首飾りを失くしてしまった。それまで一度も首から取ったことのない首飾りを初めて外して男に見せてやる日だった。首飾りの真ん中についているペンダントの蓋を開けると、父親がその中で寂しそうに笑っていた。男はその首飾りを一度だけ着け

てみたいと言った。「一度だけだよ。」九歳の女は初めて十歳の男に、母親が遺してくれた首飾りを着けてあげようとした。男の手に首飾りを手渡す時の奇妙な感じを女は覚えている。何と言ったらいいのだろうか、果てしなく遠い所の土地がひび割れ、そこから湿った風が吹いて来るようだった。自分の内部ではなく胸中の奥深い所で激烈な痛みのようなものが噴き上がると思ったら、バレエボールが飛び込んで来てぼんと跳ねる音がした。女は慌てて男の手から首飾りを取り戻した。それから女は自分の首にその首飾りをかけ、男は後ろから首飾りの留め金をかけてくれたのもはつきりと覚えている。ところが屋敷に帰ってみると、首は首飾りを失くして何も無い空間になっていた。女は大急ぎでまた走って、リンゴの木の下に目を皿のようにして首飾りを探したが、見つからなかった。膝に顔をうずめて泣いていたが、男が後を追ってきた。「泣くなよ。」男は後ろから大きな手で女の涙を拭いてやった。「僕が大きくなったら。」男は言った。「それと同じ首飾りを作ってお前にあげるよ。」

リンゴの木の横に男の自転車が見えてきて、もう少し遠くの乳母の家から出て来た男が、走って来る女に向かって手を振るが見える。女はさらに力を込めてペダルを踏み、速度を上げて男のそばまで走って行く。彼の前で停まった女は恥ずかしそうにし、男は女が自転車から降りる時に倒れないように支えてやった際、汗で濡れた女のうなじに自分の唇を当てた。

女は十九歳、男は二十歳。

「乳母は家にいなかったよ。」

「どこに行かれたのかしら。」

「戦争が起きるといふ噂で、釜山に行ったんだなあ。」

「釜山って、どうして？」

「そこに乳母の妹さんがいるんだ。」

「本当に戦争が起きたら。」

女はそれ以上言葉を続けることが出来ない。女の赤い頬が不安で青くなっていく。女は男の腕を引き寄せる。

「本当に戦争が起きたら、私たちはどうなるの？」

「僕たち、変わらないよ。僕たち一緒にいるのだから。」

これを聞いて女はようやく安心する。今は何も失ってはいけないと女は考える。いや、絶対に失くさないんだと。

生まれて三歳になった時、女は祖母を亡くし母親を亡くした。女の父親は祖父が遺した果樹園と商店を売り飛ばして、漆黒の夜に満州へ行ったという。残った女たちは駐在所に引つ張られていった。刑具に縛られ、手足が千切れそうになるような酷い拷問を受けた。残った女たちは、その拷問の後遺症で幼い彼女だけを残して世を去った。しかし彼女は知らないことだった。わずか三歳だったのだから。十五歳の時、女は広島に原子爆弾が落ちたという噂を聞いた。広島の人たちの顔がゆがみ、手足がねじけ、鉄骨が熱で溶け出し、歩いている人の体が石塀に叩きつけられ

て突き刺さり、臨月の女の腹の中から胎児が飛び出したという。敗戦した日本の天皇が無条件降伏するという声を、女は学校の講堂でラジオを通して聞いた。少しトーンの高い声だった。太平洋に引つ張られていった兵士たちが故国に戻つて来た。海外の独立運動家たちが中心となつた臨時政府の人たちも故国に戻つて来た。しかし漆黒の夜に満州に行った父親は戻つて来なかつた。その時初めて女は自分に乳を飲ませて育ててくれた乳母に、自分が誰であり何故この家に来て暮らしているのかを聞いた。「私に、何を知っているとこのの。」乳母は女を後ろ向きに立たせて女の黒い髪をほどこき、そしてまた綺麗に結つてやつた。「旦那様がお前の父親と信義厚くしていたという以外に知つていないよ。旦那様が三歳のお前をおくるみにくるんでこの家に連れて来られた時、その時までお坊っちゃん私の乳を飲んでいたねえ。その首飾りはお前から取り上げようにも取り上げられなかつたよ。生まれてこのかた泣きもしなかつたようなお前が、誰かがその首飾りを触ろうとすると死ぬくらいに大声で泣いたのだから。それを今日はどこに忘れてきたのか？ともかくお前がここに来る前のことなんか、私は分からないよ。」

男が乳母の手で育てられるようになったのは、彼が産まれたその産室で生母が死んだからだった。そして乳母がこの男の子に乳を与えることになつたのは、難産の末に子は死んで自分だけが助かつたからだつた。孤独の男の子は乳母の懐から離れようとしなかつた。産まれたばかりの子を亡くして心を痛めていた乳母は、その男の子の孤独の肌において胸を抱き刻みつけた。その胸のなかで孤独の男の子もまた乳母のにおいて刻みつけた。それだけでなく、乳母の指の動きや風が吹いてもなびかないほどにバサバサの乳母の髪の毛や、乳母の胸から漏れ出る悲しい溜め息

の音も。その乳母の手に女も預けられた。産んだばかりの子を亡くしていた乳母は女の子を受け入れるや、その女の子の頬から男の子が漂わせていた同じ孤独のにおいを直ぐに感じ取った。乳母は男の子を前に抱き、女の子を後ろにおぶつて育てた。板の間で一步一步と歩き方を教え、空を飛ぶ鳥の名前を教えてやった。ごま油とごま塩の混ぜご飯を子供らに食べさせようと忙しく働き、縁の下で子犬を産んだ犬に噛まれないようにと「猛犬注意」という字を教えた。女と男は乳母の手から孤独の存在から脱け出し、凛々しく美しくなっていた。男は山のような体つきとなり、女の綺麗な眉の下には比類のない高貴さが漂った。男は乳母を「オンマ（お母ちゃん）」と呼んだが、女は乳母を「ユモ」と呼んだ。しかしその時男も女も、乳母を「オモニ（お母さん）」と呼べなかった。男と女に物心がつく年頃なつて、乳母が「旦那様」と呼ぶ男の父親は社稷洞の敵産家屋の一軒を買い入れて、そこで乳母の代わりにご飯を作るお婆さん一人を置き、男と女はその敵産家屋に引越した。二人の勉強のためであった。

女と男は来る時とは違って、帰りは自転車を押して屋敷に戻った。

「もう一回、言つてちょうだい。」

「何を？」

「戦争が起きてても、私たち変わらないということ。私たちは一緒にいるということ。」

「僕たち、変わらないぞ。僕たちは一緒にいるぞ。」

二人は誰が見ても、お似合いの青春カップルだ。二人が一緒にいれば、誰もが二人の素晴らし

い調和に感嘆の声を上げるようになる。男の明敏な姿は女の優雅な姿と並ぶとさらに光り輝き、女の水滴のような繊細さは男の濃い眉とともに際立つ。見る人はみな非の打ちどころのない二人の調和に感嘆したが、男の父親である屋敷の主人と二人を育てた乳母だけは、この二人の美しさから遠く離れて見ていた。彼らは二人の男女の完璧な調和を見ながらも、それぞれの人生の裏面を考えていた。何かの苦しみが二人の間に入り込まないか、という。今は二人があれ程に美しいだけに将来に苦しみが待っていること、あるいは苦しみを知るようになるのだという恐ろしさを感じていたのである。男と女は最高学府の学生になって、男が村では初めてピアノを弾ける人となり、そして女が村で初めて男のピアノの伴奏に合わせて讚美歌を歌う人になった時、乳母の胸の内で時々頭をもたげる恐ろしさは、不吉感によって更にこみ上げてきた。男の伴奏に合わせて歌を歌う時の女の表情が、これから起きる何かを待っているようであったから。

屋敷の主人が二人の結婚を急いだ理由も、ひよつとしてその恐ろしさを忘れようとしたからかも知れない。今、二人は結婚式のために村に帰って来ていて、式の準備は順調に進められている。男の父親である屋敷の主人は女をおくるみにくるんだ時から男の結婚相手と考えていたのであった。この美しい善男善女の結婚式は、誰もが愛の儀礼に見えた。二人には譲り受けた屋敷と土地と反物の店があり、声楽科の女はピアノを弾く男と一緒に大学卒業後に太平洋を渡って留学するつもりであった。屋敷の主人の夢は学校を建てることで、男に自分の夢を実現させる考えであった。男もまた、自分たち若者二人が社会の事を十分に学んだ後に、父親の夢の中に自ら飛び入って音楽学校を建てる考えを持っていた。そして太陽のような子供たちを受け入れ、歌を歌い、ピ

アノを弾こうと思つていた。

しかし四月のこの朝。

女は不安のボールがとんとんと音を立てて跳ねているを感じる。男は大きくなつて本当にそれと全く同じ首飾りを女の首に掛けてあげた。自分の写真を入れて。女はその首飾りに触つてみる。しかし依然として、いつだったか以前に自分の胸の中で跳びはねていた白いバレーボールが、心の中でまたとんとんと跳びはねている。ボールは女の内部からぼんと跳んだと思つたら落ち、また跳んだかと思つたら落ちてとんとんと転がり回る。

二人の結婚式は屋敷の庭で、新式と旧式が半分ずつで執り行われた。女はチョクトウリ（日本の角隠しに相当）を被り、男は紗帽冠帯（衣冠束帯の礼装）を身に付けたが、長老がおらずに代わりに主礼（媒酌人）がいる。肉汁の上に錦糸卵が見栄えよく浮かんでいる婚禮ソバの代わりにミートボールが作られて、村人たちが初めて見る果物を小さく切り、干しブドウを振いてマヨネーズで混ぜ合わせたサラダが各テーブルに置かれた。ソウルから来た友人たちは、バイオリンとピアノ、チェロで合奏をする。彼らが爪弾く弦の響きにテーブルの上の果物サラダが音符のように飛び出そうとする。女は幣帛（ベーク）新婦が舅姑に対面する儀式）を終えた後で、耳の下にナデシコの飾りを差して、祝い客たちと挨拶をかわす男の横で微笑んで立っている。結婚披露宴の席の男は今までのどんな姿よりも秀麗で、女は清く芳しい。写真屋が忙しく走り回つて二人の秀麗さと清さと芳しさをフィルムに収めるのを見守りながら自分の胸中に、恨みと嘆き、が醸し

ているのを、屋敷の主人はすぐに気付いて顔をそむけ、後ろを向いた。

夜。

リンゴの木の下で、女は唇を男の耳元に当ててカンタータ風のアデライーデを歌う。心の中で、アデライーデのところを男の名前に替えながら。「アデライーデよ、私は一人彷徨ってみた。鏡のような小川の水を見たり、アルプスの雪に覆われた山頂を見ても、夕日の黄金の光の雲を見ても、夜空に輝かく星の下で立っていても、アデライーデよ、あなたの姿が輝いているよ。」男も後について歌う。「いつか僕が死んだら僕の心臓に花が咲くから、真つ赤なその花びらの上にもお前の顔がくつきりと輝くだろう。」男の山のような肉体が温かくそして優しく女の体を重ねたのだろうか。女は四月のその日の朝から、内部でとんとんと音を立てて跳ねていたバレエボールを初めて忘れて深い眠りにつく。空いっぱいに広がる星たちに手が届くような、少しの不純物もなくこの世との完全な結合を感じながら。

二ヶ月後、女は部屋の床に小菊の入った花瓶を投げつける。

結婚してから二カ月の間の女の姿は美しく洗練されていた。月夜の白百合のように明るかった。袖から出ている手の指さえも、雨が降った後の百合畑から漂ってくる香りが染み込んだようだ。二人とも健康な肉体の持ち主だった。二人の夜は激しかった。男は外から帰って来て土埃のついた顔を洗うのもどかしくて、すぐに女を押し倒すことが毎回であった。初夜を迎えてから二ヶ月余り、女はもう喜びを知る体になっていた。女の清らかな美しさの中へ、官能は香しくいっぱ

いに染み入った。その成熟は、歌を歌う女の声の中にも染み入って、今は女が歌を歌うのではなく、歌が女に吸い上げられるようだった。女の変化を最も喜んだのは、もちろん男だった。

ところが花瓶を投げつけた時の女の内部からは百合のような清純さと濃厚な官能がきれいに抜けてなくなり、いつか見た白いバレエボールがとんとんと転がり出す。

「それは絶対に駄目なのよ。」

花瓶は壊れることも、男を傷つけることも、花を散らかすこともなく、ボールのように転がっていつて壁面で止まる。壺のなかの水だけが流れ出て、男の方に流れていく。

「友達らはみんな行っただよ。」

女は膝を曲げる。彼を止めることは出来ないと感じる。彼女が頼んで行かない人であつたら、最初から話をしなかつただろうに。

ふと彼女は自分の知らない遠い昔、漆黒の夜に祖父の財産を売って満州へ行つたという父親を思い浮かべる。父親の顔は一度も見たことはなく、どんな姿だったのか分からないが、今のこの男と同じものの言い方で言つたのだろうか。「ふ、俺も行かねばならない」と。そしてやはり顔を知らない母親も部屋の中の丸い何かを投げつけて「それは絶対に駄目よ」と言つたのだろうか。

戦争が始まってから、もう何日かが経つた。明け方に鳴り響く空襲サイレンは一日も止むことがない。ラジオは戦争が南の方の勝利だと言っているが、そう言っている間にも漢江の橋が断たれて、北側の人たちは潮が満ちるように南側に押し寄せられて来ている。すでに街では両親を失つた子供たちが泣きわめいている。

ところが男は国軍兵士になると言う。戦場に行くんだと言う。

「戦争が起きても私たちは変わらないと、私たち一緒にいるんだと言ってたじゃないのよ。」
「僕が新婚だからと、友達らは僕に言葉もかけずに志願したんだぞ。」

内部でとんとんと音を立てていた白いバレーボールがもう大きく飛び跳ねてしまったことを、女は悲しくも悟った。女は花瓶を真つすぐに立てて、散らばった小菊をまた集めて挿し、男の方に流れていった水を拭く。

「私に時間を下さい。」

平然を装うが、押し寄せる悲しみで女の目には涙があふれる。返事をしなかった男がようやく約束する。

何日間か、男は優しく女の面倒をみる。玄関から上がる時でさえ、男は女の手を持ってあげる。ふと女は、自分は靴が脱げかかって泣いている幼い女の子で、男は脱げようとしている靴をまた履かせてくれる父親のようだと思う。しかし女は男が優しく面倒見てくれることに喜びを感じる。ことが出来ない。今の男の優しさは自分だけに向けてくれていたのではなかった。男は廃墟の街から家の狭い庭に忍び込んだ野良猫にさえも別れの挨拶をするぐらいにやさしくなっている。猫に食べ物分けてやり、猫が塀を飛び越さずに薬に外に出られるように仕切り戸を開けてやる。そうこうしているうちに、男は女と話をしなくなる。

明け方に目を覚ましみると、そばに男がいない。紫色の糸でスマイレを刺繍した枕が冷たい。男が板の間か台所で動いているのではないかと耳をすませたが、何も聞こえない。電気は消えてい

る。女は起きて外に出る。狭い庭に向かつて男が立っていた。爆撃を受けた空であつても、星が浮かんでいる。男の背中。初めて見る背中ではないが、初めて見るように感じる。それでもそこに男がいるということが幸いである。目が覚めて、男が頭を置いてた枕に触つて非常に冷たいと感じた時、女は男が戦場に行つてしまつたと思つた。時間をくれないで行つてしまつた。

「そこで何をしているの。」

男はしゃべらない。女の方に顔を向けることもしない。彼は麻痺したかのように、狭い庭の壁を見て立っているだけだ。彼はそこにいても、彼の心は既に行つてしまつた。戦場へ、そして友人たちのところへ。

「あれほど幸せだつたのに」と女は思つた。「あれほど優しくかつたのに」と。

二人が一緒に子供の時を過ごした部屋には、古くなつた椅子と針箱、大きなミシンとペダルの付いたオルガン、古臭い蓄音器が整然と置かれていたのを思い出す。その部屋は男が生まれた部屋であること、そして生母が男の子をやつとことで産んで直ぐに亡くなつた部屋だということを女は後になつてから知つた。ある時、男と女がその部屋に遊んで隠れていると、乳母は金縛りに会つたように動かなかつた。「もう少し食べなければ……」と乳母は茶碗を持つて追いかけても、二人がその部屋に隠れるとそれ以上追いかげず、ドアの外から中に向かつて叫ぶのだった。「何処にいるの。どうか出来てちょうだい。」若い乳母は泣きそうになつた。そんな乳母の声は、遠くから幾つもの山を越えて来た山びこのようだった。「もう食べなくてもいいから、この部屋から出て来

てちょうだい。」その時の乳母の心情はどうだったのだろうか。

男の頑固な背中が震えており、女は心が揺らぐ。古い部屋の椅子や針箱、ミシンやほこりの被ったオルガンなどの思い出が自分の中に流れ込み、男の魂は二人のすみかである敵産家屋から外へ出て、もう戻つて来ないと感じる。愛が与えてくれた喜びはチョガクイブル（布の切れ端で作った布団のシート）のように、男の魂の外で翻っていることも。

「行つてください。」

女はドアの枠に手をつきながら言う。「しかし……」と女はさらに言う。「連絡が途絶えるようなことはないようにね。必ず戻つて来てね。私はここで一步も動かないで待っています。」

その時男は振り返つて両腕で女を抱き、背中をさする。その瞬間、顔も知らない父親が戻つて来たのだと女は感じる。母親はあの時何があつても生き残り、戻つて来た父親からこのように慰勞して貰わなければならなかったのに、と。あの漆黒の夜に家を出ても、このように戻つて来たと思えば、父親はきつと家を心に止めながら出たに違いない。漆黒の夜に出た自分の家を、鶏が卵を抱くように心に抱いて出かけたのだ。

その晩、女と男は狭い庭で、今までにない方法で愛を交わした。女は男の胸に涙でぐしよぐしよになった顔をうずめ、今まで一度も聞いたことのない屋敷のあの部屋にあるペダル付きオルガンの音を聞く。ほこりの被ったオルガンは、最初は喘ぎ声のような不協和音を出す、徐々に澄んだ音となつていく。ある瞬間、二人の内部では自然に喜びがあふれ出て、二人の顔にはおのずと微笑みが浮かんだ。その微笑みの中で、残るとか行くとかいふ考えが消え、ぼんやりした恐ろ

しさも消えて、果てしなく広い平原や深い溪谷にこんもりと積もる白雪のような清新さが自由に広がっていた。愛が終わっても女と男は互いを抱き締め、唇を合わせ、幼い頃の話をしながら時々笑う。今二人の別れには、少しの心の揺れもないように見える。

その晩の間にも露が降りて、鳥たちがさえずり、明け方になった。

最初に目を覚ました女が男の体を見下ろす。また悲しみがよぎるが、女は幸福の瞬間の方がはるかに多かったと考え直す。その幸福の瞬間は本当に自分のものだったとも考える。これからはその瞬間がこの男と自分を守ってくれるのだということも。女は自分の白い首筋に掛っていた首飾りを外して、ペンダントの中から男の写真を抜いて代わりに自分の写真を入れ、まだ目が覚めていない男の首に掛けてやる。静かに起きて台所に行き、大根を千切りにして大根汁を作り、米を洗い、早い朝食の支度をしてから顔を洗う。いつもの朝と同じように女は動くのだが、そして手を抜くことなく朝の仕事てきはきとこなすのだが、時折心の中でとんとんと音を立てていたバレーボールが雷に変化して自分の内部に落ちるような苦痛を感じる。部屋に戻って化粧をしている間、女の手は震えている。女は自分の服のなかで一番派手な色の服を取り出して着る。女のスカートに金色の蝶々が百日紅の木の枝に留まっているのを見ながら、男は女が作った温かい食事をみんな食べる。男が家を出る時はちょうど夜が明けようとする頃で、世の中はまだ露に濡れている。

爆撃が始まったある日、女は男の初めての手紙を見る。

「戦場は、外から考えているよりは平和だ」と書かれている。「通信兵になり、月光を浴びながら書いている」と。「戦争は直ぐに終わるようで、そうなれば直ぐに会えるだろう」と。「月を見ながら、お前とこのように離れて暮らすのは初めてだ」手紙は続いている。「三歳の時に、お前が我が家に来てからの話なんだ。家に帰ればお前に必ず聞いてみたいことがある。いつから僕を愛するようになったのかということだ。その前は僕たち、兄妹のようだった。今すぐにお前の答えを聞けないのが恨めしい。これほど気にかかっているのだが、なぜお前と一緒にいる時に聞いてみなかったのか、今になって思う。離れているということは、このようなことなのかと思う。お前は知っているか？僕がいつからお前を愛するようになったのかを？それはお前が十五歳の時だった。解放になった年（一九四五）、お前が乳母に『私は誰で、なぜこのお家で暮らしているのか？』と聞いていたのを立ち聞きした時からだった。乳母はお前の髪を解き、また結ってあげていたら。乳母に頭を差し出してじっとしているお前は、泣いているようだった。だから僕は乳母に言っておいたんだ。また『私は誰なの』と聞いたなら、『僕が愛している人だ』と言ってくれと。乳母にそのことを聞いたら、僕がそう言ったと教えてくれるだろう。お前が一度も見たことのない父親を探しているということも知っている。いや、父親ではなかったかも知れない。しかし僕としては父親だと思っている。お前が誰を待っていたにしても、僕は誓ったのだ。僕はお前を待たせることはしないということだ。ところが今はお前を待たせているねえ。しかし直ぐに終わるよ。今は男としてやらねばならない仕事がある特別な時だから、僕にどう出来よう。けれど僕は必ず帰るし、帰ればまたお前を待たせるようなことはさせないよ。」男は書いていた。「お前を愛

している。」手紙を読みながら、女は男がそばにいますと思つて答えた。「分かっています。」

爆撃が激しくなつて、人々は避難をし始める。ここにいたら、みんな死んでしまふだろうと。隣の家の女が門を叩く。「早く、早く。急いでください。今晚また爆撃が始まるということです。ここから離れなかつたら、死にますよ。」

しかし女は白いガーズに水を濡らして、あの時に男に投げつけた丸い花瓶を磨く。

どこに逃げろというのか。家を留守にすれば、彼が送ってくれる手紙を誰が受け取るというのか。必ず逃げねばならないならば、行きたい所は一カ所だけだ。それは男がいる所、戦場。しかしそこは女として行くことの出来ない所であり、ましてや避難所ではない。

避難する人たちを見ながら、女は表門をしつかりと錠をおろす。彼が手紙を送ってくるのだ。ひよつとして彼の部隊がここを通り過ぎるかも知れない。そうすれば、彼はちよつとの間でも隊列を離脱して門を叩くのだ。

けれども手紙は来ない。毎日女は表門を見ていたが、何の消息も届かない。廃墟の街を見下ろしながら男の手紙を待つ女は、苦悩の渦に落ち込む。「何故このように遅いのか。」最初は男がまるで学校にでも行つたような感覚で、何故このように帰りが遅いなどと考えていた女は今、男の不在に心が乱れてくる。女は、彼がにっこり笑つて帰り、靴など脱いでいるような気がして、さつと押入れの中に隠れる。「手紙を送らずに私を心配させただけに、きっと私を探してくれるだろう。」しかし女が狭い押入れに隠れている間に聞こえるのは、「何処にいるのか」と自分を探す男

の声ではなく、爆撃の音である。押入れの中には古着や使わない食器類、夏の蚊帳、大小様々な本などが積み重なっている。彼は、どこにいても万一銃に当たっても手紙を送ると言っていた彼は、いつ来てくれるのか。女は不在の男に向かつて激しい悪口を浴びせる。「何なのよ？男どもはやるべき仕事があるとかいって、大体何だと言うの」。女は押入れの中の古着を投げつける。「友達らはみんな行った、だなんて。ウンだったわ。戦場に行きたくないと親指を切った友達もいるというのを、私は知っているのよ」。使わないで積み重ねていた食器類を取って投げつける。ガラスの破片が女の白い腕に刺さる。蚊帳は引き裂かれ、本はひっくり返る。「男としてやるべき仕事なんて、女を危険にさらしておいて外に出ることなの？ずっと昔から戦争はみんな男どもが起こしたもののよ。男としてやるべき仕事なんて、敵の頭の皮を剥ぎ、刃で突き刺し、街を廃墟にし、川に架かった橋を壊し、火を付け、銃を撃ち、若い兵士を殺す、そんなことなんですか。あなたは行きたくて行ったのではなく、女と一緒に家に残っているのを友達らに知られたら困ると思っただけなのよ。家で女と一緒に隠れて臆病だと言われるみたいで、それは男のやるべきことではないと考えたのよ」。

「それでも」心の混乱の末、女は「それでも」と考える。「それでも、あなたは今私に手紙を書いているでしょう。その手紙が私のところに届くには十日はかかるでしょう」と。心の混乱でさつき投げつけたものを整理し、カレンダーに○をつける。その十日の間に爆撃が三回もあって敵産家屋の塀が壊れ、今は庭と道路の区別がなくなっている。夜になってもう野良猫すら来ず、周りは索漠として荒れ果てている。十日が過ぎても、戦線から手紙は来ない。

電話の鳴る音。

「もしもし」

屋敷の主人だ。

「そこで一人で何をしているのか？」

「……」

「早く避難しろ。」

「……」

「屋敷に行くな。そこは人民軍たちの宿所になっている。」

「お父様。」

女は屋敷の主人に初めて「お父様」と呼ぶ。屋敷の主人は慶尚道陝川郡の深い山の中の寺の名前を挙げて、一人の老師の法名も出す。「そこまで無事に行くように。」と言う。「戦争が終わる時までそこで過ごして、戦争が終わったら屋敷で会おう。」と言う。「どんなことがあっても、戦争が終わるまで屋敷に行つてはいけない。」と呼びかける。「もう電話することは出来ないだろうし、自分も今身を隠している。」と言う。

しかし女は屋敷の主人の言うことを聞かない。さらに家の奥に入つて行く。まるで抵抗できない大きな存在から二人のすみかであった敵産家屋から一步も動くなと命じられたかのように。

心の混乱の果てに女は沈鬱になる。男は約束を破る人間ではない。状況が私との約束を守れないようにしているのだ。男が手紙を送ることの出来ない状況はどういうものか、女は考えてみる。

彼が約束を守れない状況というのは、それは全て女には不吉なことである。「ひよつとして彼に何かが？」女は恐れおののく。「そんなことは絶対にない。」女は男の母親のことを思う。その男は、産まれて一度も母親から慰めもお叱りも受けたことがない。彼の母親は戦場に行っている息子に、昔母親としての務めが出来なかつたことを、今してあげられると喜んでいよう。母親は息子を愛し、息子を砲弾から守ってくれるに違いない。

女は誰もいない家に一人でいるのだが、自分が別人になって肉体から脱け出て、自分が何をしているのかを見る。自分の肉体はわずかに残る男の痕跡を触っている。結婚写真や男の体臭が付いている衣類、二人の共同収集品であるレコードと女の所有物である燭台。肉体は、女が無邪気に二百個以上も収集してきた燭台を一指尺（二本の指を広げた長さの単位―十五cmぐらい）間隔に部屋から板の間まで立て並べて火を点ける。その火の中で座っている自分の肉体を見る女の内部には、何一つ頼る所もなく生きてきた人生の中で二人が本当の結婚式を挙げたのは二か月前ではなく、ずっと昔のことであつたと思うと、幸福感があふれる。普通の人ならば出会ってから結婚して過ごす時間を、二人はずっと昔から分かれることなく送ってきたと、女は考える。「そのように考えましょう。」女は彼を待ち焦がれながら、今までとは違う、やつれた美しさ、を漂わせる。彼を待つことによつて、これまで以上に彼への愛を気付かせてくれる。しかし私は彼をこれほどに待っているのに、今彼は私を待つことが出来ないでいる。女は悲しんだ。同じ空の下でこのように違う状況に置かれるのは初めてだと女は考える。再びこのようなことがあつては駄目だということも。しかし男が本島は自分のところに来ていふと考える。「私が待っている限り、彼は

来るのだ」と。

ある日のことだ。

ある女性が子供をおくるみにくるんで抱き、爆撃で壊れた塀伝いに家に入って来る。女性がパサットという音を出して、部屋の中にいた女が何事かとドアを開けるや、女性は仰天する程に驚き、抱いていたおくるみを後ろに隠す。

「避難して誰もいないと思っただので…」

女性は元に戻ろうとする。女は「大丈夫だから入って来い。」と言う。おくるみの中から出て来た女の子は小さい。三歳だという。乳を飲むことが出来ず、泣く力もないという。「可哀そうなお嬢ちゃん」、女性は小さな子をまたおくるみにくるむ。

「どうしたらいいのか分からないの。」

今にも女性は泣きそうになる。「私一人でこれからどうしたらいいのか、分からないのよ。」と言いながら。

「私は、あそこに丘があるでしょう、その家で奥様を手伝っている者なのです。ご主人様は警察庁に勤めている方です。直ぐにジープを寄越すと電話があつたのですが、その間に爆撃がありました。まとめていた荷物を庭に出しておられた奥様が爆撃を受けて亡くなりました。台所にいた私が飛び出した時には、お嬢ちゃんが亡くなった奥様の背中で泣いていました。ご遺体を横に置いて過ごしてきました。ジープがすぐに来ると思ったのですが来ませんでした。怖くて、もう

これ以上我慢できなくなりました。街にはネズミ一匹いません。一人でお嬢ちゃんを連れてどこに行ったらいいのかわからなくて彷徨っていたら、この家が一番きれいに見えたので入ってみたのです。生きている人の顔を見るのは久しぶりです。」

女がおくるみの中から女の子を抱き上げると、女性は涙ぐむ。子供は白い綿のシャツの裾をぎゅっと掴んでいる。

「奥様が好んで着ておられた服です。お母様のおいが出ているみたいです。手から離しません。」

女がシャツを取ろうとすると、女性は止める。

「だから止めて下さい。シャツを取ろうとすると、死ぬぐらいに泣きます。寝る時も手で掴んで寝るんですよ。洗濯も出来ないのです。手から放さなさいのです。」

「……」

「亡くなったお母様の乳を吸ってきた子供です。可哀想なお嬢ちゃん。戦争さえなければ、みんなから可愛がられていたでしょうに。」

今この敵産家屋では三人が暮らす。

ある日ラジオの音が切れる。電気もつかなくなる。全ての通信網が切れたのである。もう手紙も来ないのだ。暗くなれば三人は地下倉庫に下りていく。部屋で明かりをつけると、中に人がいるということを知らせる信号になる訳で、三人は地下室に寝具を運んで置いて、ろうそくに火を

点けて夜を過ごす。子供には米を水にふやかして粥を作つて、その粥をふるいで濾したものを食べさせる。子供は世の中の動きを知っているかのように、シャツをぎゅつと掴んで泣くことはない。自分の立場を知っているみたいに。

女性は身の世話をする仕事に慣れていくようで、女の面倒をみようとする。女は女性の口から「奥様」という言葉が出てくるのかと思つて気が気でない。女よりも十歳は年が上に見える女性の動きには、謙虚さが顔の皮膚のように染み込んでいる。その謙虚な女性が、ある日女に「なぜ避難しないのか」と尋ねる。女は女性に男の話をしてやる。「彼の手紙を待っているために行かなかつた」と言う。

「手紙は来ましたか。」

「そうなのよ。来たのよ。」

女は男が送つた手紙を女性に見せてやり、読んでみると言う。女性は恥ずかしそうにする。

「私は字を読めません。私に読んで下さいますか？」

「読んであげますよ。」

女は手紙を持つてろうそくの火の元に行く。

——ここは外で思っているよりは平和だ。私は通信兵になつて、今月光を浴びながらこの手紙を書いている。戦争はすぐに終わるようだ。そうしたらまた会えることになる。

ろうそくの火の下の女の目には男が見える。月光を浴びて手紙を書いている男の小鼻や手。このように長い間来ていないというのに、すぐに会えると言うなんて。

「もつと読んで下さい。」

——月を見ながら、お前とこのように離れて暮らすのは初めてだ。三歳の時に、お前が我が家に来てからの話なんだ。家に帰ればお前に必ず聞いてみたいことがある。いつから僕を愛するようになったのかということだ。その前は僕たち、兄妹のようだった。今すぐにお前の答えを聞けないのが恨めしい。これほど気にかかっているのだが、なぜお前と一緒にいる時に聞いてみなかったのか、今になって思う。離れているということは、このようなことなのかと思う。お前は知っているか？僕がいつからお前を愛するようになったのかを？

ろうそくの火の下で女の声が震えている。男が帰って来れば話してあげる。私があなたを愛するようにしたのは、愛するようになったのは……ちょっと休んでから話してあげる。三歳の時からでした。乳母の乳を二人で飲む時からでした。私はその時聞きました。いきなり現れた私が乳母を独り占めしないかと思つて大声で泣いた男の子の嫉妬の泣き声です。母親を知らない男の子の、愛情を求める泣き声です。その時からあなたを愛したのです。私は可愛く育て、女が持つ全てのものをあなたにあげねばならないと思つたのよ。私はあなたの母親になりたかつたのよ。

「もう少し読んで下さいませんか。」

女性は、ろうそくの火の下の女の横にびったりとくっついて来た。

「気になりますか？」

「はい。」

女性は自分の気になるのが誰なのかを女が気付くと思つて肩をすくめる。

——それはお前が十五歳の時だった。解放になった年（一九四五）、お前が乳母に『私は誰で、なぜこのお家で暮らしているのか？』と聞いていたのを立ち聞きした時からだった。乳母はお前の髪を解き、また結ってあげていただろう。乳母に頭を差し出してじっとしているお前は、泣いているようだった。だから僕は乳母に言つておいたんだ。また『私は誰なの』と聞いたなら、『僕が愛している人だ』と言つてくれと。乳母にそのことを聞いたら、僕がそう言つたと教えてくれるだろう。お前が一度も見たことのない父親を探しているということも知っている。いや、父親ではなかったかも知れない。しかし僕としては父親だと思つている。お前が誰を待っていたにしても、僕は誓つたのだ。僕はお前を待たせることはしないと。ところが今はお前を待たせているねえ。しかし直ぐに終わるよ。今は男としてやらねばならない仕事がある特別な時だから、僕にどう出来よう。けれど僕は必ず帰るし、帰ればまたお前を待たせるようなことはさせないよ。

「終わりですか？」

「一言、残っているわ。」

女はその一言を静かに女性に読んでやった。

——お前を愛しているよ。

女は男が横にいますかと思つてまた胸の中で答える。「分かっていきます」と。

女が手紙を折りたたんで封筒に入れる影が地下室の壁面にゆらめく。手紙をみんな聞いた女性はしばらく声が出ない。女が手紙を胸元のポケットに入れると、女性は「手紙をよくお書きになるようですね。」と言ふ。「字を知つていれば、私も手紙を書くのに。」とも。

「誰に書くの？」

「さあ、それは分かりません。」

自分の答えが可笑しかったのか、女性はホホっと笑つた。

「手紙を書きたいの？」

「はい。」

「だったら、明日から私が字を教えてあげましょうか。」

「字をですか？」

「はい。」

「私に字を、というのですか？」

「そうですよ。」

地下室の中で謙虚な女性の顔が、ヒマワリ畑のように明るくなる。

女性の震える声がそのヒマワリ畑をかき分けて流れ出る。

「そうして頂けるなら、私はお祈りの仕方を教えて差し上げます。」

「お祈りの仕方？」

「はい。」

謙虚な女性は女の両手を持って合わせてやる。手のひら同士合わせた女の手はろうそくの火の下でピンク色を呈する。一方で荒れてごつごつしている女性の手は大工道具みたいだ。

「人はどこでも手を通して話をするでしょう。どこでもお祈りできるこの二つの手があると：そう考えましょう。ある時は自分から永遠に去る人からも大事にされた手なのですが、お祈りを始めてからは一度も手を大事にしようと思わなくなりました。休む暇もなく、手をこき使って働きましたから。」

謙虚な女性の骨が飛び出ている手首と平たくて分厚い指は、何でも知っているようだ。出会って、知り合って、愛し合って、そして別れる人のことを。

次の日、女は女性の手の色鉛筆を握らせる。白紙にマス目をつけ子音・母音を書いておき、それを手本として女性に書かせる。色鉛筆を握った女性の大工道具のような手は、字を書くには不器用である。女は女性が筆を動かす一マスごとに一緒に手を動かして、そのマス目に字を書いて見せる。へや、あかちゃん、こめ、ちか、ろうそく、まじ。ある晩空襲サイレンが鳴り、朝にな

つて見るとすぐ隣の家がすっかり崩壊し、我が敵産家屋の上の方も壊れて家は半分になつてゐる。女は「ばくげき」と書いてから復唱させる。「ばくげき」。復唱する女性の声を待ったが、女性から出てきた言葉は違ふ言葉だ。

「ここにいと、いつ死ぬか分からなくて、たまらないです。私は子供がいるから逃げられませんが、避難してください。夜にここさえ無事に脱出したら、何とか人がいるところに行けるじゃないですか。」

女は顔を横に振る。

謙虚な女性はたたみかけるように言う

「ここであなたが出来ることは何も残つていないんですよ。」

「彼を待つことが残っています。」

「電気も来ず、ラジオも切れたのですよ。戦線からここに来る通信網もみんな切れたじゃないですか。この状況で何を待とうと言うのですか。」

「だから、むしろ心が楽だ」と女は言う。「通信が正常な時の方がかえつて辛い」と。「その時はなぜ手紙が来ないのか不安だった」と。「手紙を書くことも出来ないくらいに彼の身に不幸なことが起きたのではないかと、心が地獄だった」と。「しかし全ての通信網が切れた今は、待つことが不安でなくなつた」と。「彼は約束通りに無事だという手紙を書いて私に送ったけれど、通信網が切れたせいで私のところに到着していない」と。「すぐに通信網が復旧されるから、そうなれば今どこかで留まつている彼の手紙が来るのだ」と。

「待つていたら死ぬこともあります。」

「今は誰もが死ぬかも知れないのです。」

女は誰もが死ぬかも知れないと自分で言いながら自分が悲しくなる。そうだ。今は誰もが死ぬかも知れない。彼は戦場で、私はここで。「死ぬといつても、私に残っている仕事は、彼を待つことだ」と女は女性に言う。

「私は幸せの瞬間を見たんですよ。それはこれから何が起きても、取り替えることの出来ない瞬間です。その瞬間は、私の人生にもう何も起きなくても、私を素晴らしい人生に導いてくれるのよ。その瞬間は、これからの私の人生を守ってくれるのよ。」

その時になって、謙虚な女性は女の言葉を復唱する。「ばくげき」。

ある日、謙虚な女性は女に言う。

「家の中に食べるものが何もありません。」何日かしてから、謙虚な女性がまた言う。「私が奥様の家に行つて、米を持って来ましょう。」

女は止めた。「そつして上戸領軍の目について引つ張られでもしたら、どうなるというのか」と。二日後、謙虚な女性がまた言う。

「このように飢え死にしても、引つ張られて死んでも同じことではないですか。暗くなれば行つてきます。」

夜になって、謙虚な女性は女に三歳の女の子を預けて、奥様の遺体があるという家に行った。

けれども女性は帰って来ない。朝になり、また夜が来ても女性は帰って来ない。占領軍に見つかったのか。そうでなければ？まだまだ手紙を書くには知っている単語では足りないのにと、思つくと、女は悔しい気持ちになる。戦争が起きてから家を出た人間は、男も女性も戻って来ない。

泣いていなかった女の子が、謙虚な女性がいなくなるとむずかるようになる。少し残ったコメを何とか節約して、子供にだけ粥を作り食べさせる。そのように儉約しても幾らにもならず、子供に食べさせるものが敵産家屋にはもう残っていない。女はあの女性が教えてくれたお祈りの方法を思い出す。女性の前ではぎこちなくて出来なかった十字を切る仕事を、女は一人でしてみる。

両手を合わせ、顔を垂れる。「私は謹んで主にお仕えますから……」夜になって女は子供を地下室の倉庫の部屋に寝かせておいて敵産家屋を出る。男が出てから初めて敵産家屋を出るのだ。「丘の上の家と言つてたわ。そこに何とか行くだけ行けば、食料をどれだけ取つて来れるか。」周囲は水を打つたように静かだ。どこであろうか、のっしのっしと軍靴の足音がする。呼子の音が聞こえ、突然に銃声もする。その度に女は「私は謹んで主にお仕えますから……」と、つぶやく。「私に生きていく力を下さいませ。」お祈りの終わりに男の顔がある。彼に恵みを与え、彼がどこにいても……闇の中を手探りする女の目に涙があふれ出る。「彼のことです。生じる私の心の乱れをお許しください、彼をお探しになつて無事に帰宅させてくださいませ。」

廢墟の街では破片やかけらが周りに散らばっている。あの家なのか。女はやつこのことで丘の上になると、爆撃を受けた丘の上の家が闇の中でしんと静まり返っている。女は周囲をきよろきよろ見回して、かなり以前に爆撃された丘の上の家に入り込む。丘の上の家は爆撃を正面から

受けたようだ。広く見える庭に屋根が倒れている。土の塊を乗り越えようと、自分の足に当たるぐにやぐにやしたものに仰天する。死体だ。女性が、爆撃に合った奥様、自分にお祈りの方法を教えてあげた奥様を、庭の土を掘り、杭を打って埋めた場所を表示しておいたと言っていたのだが。誰の死体なのか。お祈りが終わり、女の体は恐怖で縮み上がる。むしろ占領軍でも現れてくれたらと思う。縮み上がった体をようやくほぐし、中に一歩足を踏み込もうとすると、女は白い物体に引っ掛かってまた転ぶ。転んだ手の先に白米が触れる。女は初めのうちは塩なのかと思う。しかし明らかにコメの感触だ。コメは白い袋からこぼれ出て、散らばっている。女はあわてて白い袋を揺すって立ち上がって持とうとしたら、胸がどきんとする。死体はあの女性だったのか。女は死体の近くに行ってみる。謙虚だった女性が倒れている。コメをすくい取って出していたら胸に銃が当たったのだ。女はその女性の開いた目を自分の手のひらでつぶらせる。女がコメの入った白い袋を引っ張って庭に出るが、スコップを蹴る。あの女性が奥様を埋める時に使ったスコップのようだ。女はスコップを握ってしばらくの間ためらった。周囲は静かだ。結局女は女性をそのままにしておくことが出来ないと思う。戦争はいつ終わるのか分からず、あのように放っておけば、食べるものがない猫やネズミなどがその女性の足指をかじり、ハエが顔を覆い、アリたちが手の指をほじくって食べるだろう。腐るにしてもかじって食べられるにしても、どうせなら土の中で腐って食べられるのがいいと思う。女はスコップを持って庭の土を掘る。初めは注意深く掘ったが、後では注意なんてすることなく、ざくざくという音をいっぱいに出して地面を掘る。女的首筋と胸に汗があふれ出る。二時間ぐらい掘ってから、女は女性を引っ張ってきて穴に入れ

る。「無事に行ってくださいね。」女は掘った土を穴の中の女のの上に振り撒く。その女を埋めてから空を見上げると、朝空に下弦の三日月が浮かんでいる。蚤の這う音一つ聞こえない。女は自分が何時間も何をしていたのか、ぼんやり覚えていただけだ。家の地下室に寝かせておいてきた三歳の女の子の影が三日月の中に見えるようだったが、消えてなくなる。女はコメが入った白い袋を引きずって、周りに注意を向けることもなくとぼとぼ歩き、自分の家に戻って来る。子供は寝ている。

女がシャツを吸う子供を抱いて、敵産家屋から今度は崩れて痕跡だけ残っている屋敷へ戻った時、女が清純な美しさをいっぱいに漂わせながら歌を歌っていたあの女だということは、屋敷の主人さえ見分けることが出来ない。厚い唇に込められていた温かく明るい微笑が女の顔から消え、屋敷の主人は女と男の美しき結合を目に見ながら人知れず感じていた恐ろしさの実態を確認する。結婚写真の中の秀麗な男の横に豪華な衣装で立つ美女は消えて、女は今皺だらけの六十代の老いた女性のような。屋敷の主人は、男の失踪通知書を見せてやる。「中共軍に包囲されて後退している時に起きたことなんだ。」屋敷の主人も戦争で義足を付けていたが、自転車だけは全く戦争を知らなかったかのように昔のままの場所に置かれている。女はそのうちの一台を門の外に引つ張り出して、綿シャツを手にぎゅっと握っている女の子をかごに入れてハンドルに掛け、屋敷から五百m離れたリンゴの木に向かつてペダルを踏む。自転車の上の女の頬はぺこんと凹み、自転車のハンドルを握っている皺だらけで老衰した腕に袖が引き下ろされている。女は上衣の裾で額から

噴き出る汗を拭う。自転車に乗るのが久しぶりで、汗を拭く時に片手だけでハンドルを操作すると、自転車は無慈悲にもふらつく。その度にかこの中の子供は驚き、シャツを掴んでいる手を頬の方に持っていく。艶のない黒い髪の毛が風になびくと、それは一握りの砂塵のようになり、女の乾いた汗の臭いが空気に漂う。女はリングゴの木を過ぎる時、悲しさに沈みながら歌を歌う。「私は春の日にさまよった……いつか私が死んだら、私の心臓から花が咲くでしょう、その真っ赤な花びらの上にもあなたの顔がはつきりと映るでしょう……」清純さとみずみずしさと疲弊と焦燥の満ちた女の声は遠くまで広がり、空の下にある全てのものが耳を傾ける。リングゴの木の向こう側にある乳母の家に走って行く間、憂鬱で心細い笑いが女の潤いのない唇の周りに広がる。「彼はいつ帰って来るのか？いつになつたら屋敷にある自転車に乗るのか。」女が自転車から降りて乳母の家の門を押し開いた時、乳母は女の方に歩みよる。乳母だけが女を見分ける。「久しぶりだねえ。お前がおくるみにくるまれて私のところに来た時と同じ顔だよ。最初は誰かと思つたよ。こんな顔で私に会いに来るなんて。」乳母は涙ぐんで女の艶のない髪の毛を櫛で梳いてやる。女は尋ねる。

「ユモ！私は誰なの？」

「お坊ちゃんが愛する人ですよ。」

乳母は女の顔の皮膚の中まで厚くこびりついている涙の跡を拭いてやる。「お坊ちゃんとお前はあのリングゴの木の下で初めて会つたのですよ。私があつたリングゴの木の下で腰をおろしてお坊ちゃんに乳を飲ませていたところに、ご主人様がお前を連れて来たのですよ。お坊ちゃんに飲ませて

いた乳首をはずしてお前の口に啜えさせた時、お坊ちゃんがですよ、ひどく泣いたんですよ。けれど、お前はびくともしなかつたねえ。泣きもしなかつたねえ。」乳母は櫛を持ったままシャツを手に掴んでいる女の子の顔をのぞき込んで、「この子は誰なの」と尋ねる。女は答える。「私ですよ。乳母、思い出さない?」

3

半島をひっくり返した戦争は、百五十万人の死傷者と三百六十万人の負傷者を出す。女は地面を掘って死体を埋め、三歳の女の子を抱くようになる。もう目標物が残っていないぐらいに国土を疲弊させた後、一九五三年七月二十七日、国連軍と北朝鮮人民軍の協定で休戦状態に入る。彼は戻って来ない。丘の上の家のあの女性も戻って来ない。南北の敵対感はどんどん深くなり、民族分断体制がさらに固まる。反共イデオロギーが法を越える権威を持ち、朝鮮半島の社会全体を支配するようになる。日本列島はその間に高度成長の基礎を準備する。三年後、また四月の朝、今は少女となった女の子を連れて乳母の葬式に出た女は寂しい気持ちになり、リンゴの木を敵産家屋に移し替えようと思う。人夫たちがリンゴの木を半分ぐらい掘った時だ。土中からすくい上げた土の塊の中に、何かがきらつと光る。幼い日に女が失くしてしまつて泣いた首飾りだ。女は驚いてリンゴの木を掘るのを止めさせて首飾りを拾い上げて蓋を開く。どういふことなのか。寂しそうに笑っていた父親は消えていなくなり、そこには戦場に行った男が寂しそうに笑っている。

女は土の塊の上で首飾りを握って座っている。やがて体を起こした女は首飾りを首にかけ、人夫たちに引き続きリンゴの木を掘らせる。女はリンゴの木の根が傷つかないように白いガーゼでひげ根までみんな包んで敵産家屋の狭い庭に植え替え、その下に椅子を一つ出しておく。ある者は恩を返し、ある者は毛布を売りに出て、ある者は子供を産んで、ある者は戻って来て、ある者は外国語を学び、ある者は去って行く。その後にも長い間、リンゴの花が咲き、そして散る。

〈一九九四、文学と社会 冬季号〉